

二つの時、花袋『時は過ぎゆく』と鷗外『澁江抽斎』（二）

『時は過ぎゆく』試論——テキストとコンテキストの対照（その二）

渡 邊 正 彦

前稿章立て

- (1) テキストの冒頭
- (2) セット年齢の検討
- (3) 克巳の誕生生年の意味
- (4) 実とお初の前奏曲
- (5) 承前

(5) 日蝕

① その日も丁度良太が来てゐた。

『もうかけ始めさうなもんだ。』実も眞弓もかう言つては度々外に出て見た。それは暑い八月の末の晴れた日で百年に一度あるかないか知れないほど完全にかけるといふ日蝕の日であつた。（二十一）一五一頁^{（註1）}

② 昔は日蝕はあつたけれど、それが何時かけるか、何の位多くかけるか、そんなことはお城の中の天文所でもあらかじめ知らせることは出来なかつた。それが今では一月も二月も前からち

やんと知れて、日本が一番それを見るのに位置が好いと言つて、わざ／＼外国から研究にやつて来た。日本の中でも、陸中の水澤あたりが一番好いといふことなども新聞に出てゐた。『何でも、わかる世の中になつたな』かう老祖父は感心したやうに言つた。

『何でも、今の世の中では、学問でなくちや駄目ですよ。人間の体の中でも何でも、自分で入つて行つて見たやうに、今の新しいお医師様には、すっかりわかるんですからな。』良太はかう合せた。

（中略）

老祖父は、『年寄なんか見たつて仕方がない。役に立たない。これからは若い者はさういふことを研究して、えらくならなければならぬけれど——』かう言つて、勧められても、出てみようとはしなかつた。

暫くすると光線は次第に明るくなつて来た。（二十一）一五二—一五四頁

右で良太が『何でも、今の世の中では、学問でなくちや駄目ですよ。』と言っている言葉には、良太が維新後に旧大名の下屋敷庭園の開墾を引き受ける動機となった彼の人生上の重要な問題が潜んでいると思われる。しかし、奥の旦那である岡村繁行のモデル岡谷繁実が寒香園と命名してこの庭園を開墾し、農産物生産や観梅などの観光、麦酒製造などを行った動機については新たに発見した事実に基づいて考究する別稿を予定しているの、そこで共に論じる予定である。

ところで、この「日蝕」のコンテキスト上の事実とは明治二十年八月十九日午後二時過ぎに始まり、午後三時四十五分頃に新潟県・福島県・茨城県などで見られた皆既日蝕である。この「一〇〇年に一度」と語り手が言っている皆既日蝕は、官報一二三一号（一八八七年八月五日発行）に「観象」という題で予告と「白光（コロナ）写図心得」が載り、内務省・文部省が皆既日蝕の見られる新潟県・福島県・茨城県の郡役所、警察署、中小学校等へ白光写図心得書を配布し、スケッチするようにという勧告を出した。「論叢 天文月報第二九巻第四号」（日本天文学会発行）所載の「明治二十年八月一九日の皆既日食観測記録」によれば、天文台では皆既日蝕は見られず九十九%だったとのことである。観測は旧江戸城本丸天守台跡の中央气象台で行われた。初虧は午後二時三十六分四十四秒、復円は四時五十二分二十二秒。天文台に比較的近い岡田一家が見たのも1%残った日蝕だったことになる。「陸中の水澤あたりが一番好いといふことなども新聞に出てゐた。」とあるが、例えば二十年八月十九日（金曜日）の「東京日

日新聞」には福島県の白河が最も観測に適する地として挙げられ、「米国観測使」の一行も同地に従事する予定と報じられている。

この出来事は若者と中年（良太）、老人（彦太）それぞれの世代の天文現象とそれを予測、観測する方法に対する態度、あるいは日蝕に対する関心の差異を示し、それは作品末「五十三」「五十七」（「五十八」が終章）では彗星、アメリカ人曲芸飛行士スミスの飛行パフォーマンスに対するものとして反復される。そこでは良太はかつての彦太とやや違って柔軟であるが、ほぼ共通の態度を取る。その反復に年月の経過すなわち過ぎゆく時間の経過が人の心身に普遍的に与える影響と個人の性格の違いが描かれる。天文現象ではないが、「四十七」の眞弓が汽車が開通したと言っておかねを亡母のお幾や彼女の生まれ育った山形に誘う場面では、おかねも老齢での長時間の汽車の旅はくたびれるし、金もかかるし、興味もないと断っている。

そして、この日蝕とテキスト末尾に近い「五十三」で良太の妻おかねの葬儀の晩に近頃彗星が出ることが話題になり、一座の登場人物の誰かが「明治二十三年」も出たと語り、眞弓の姉お勝もそれに応じて、姉おつが死の直前に生んだ赤児「お孝」を母お幾が田舎に連れ帰った頃で、「本当に大きかった。こんなにありましたよ。」と手をひろげて見せ、続いて眞弓が外に出て彗星を見上げて永遠の宇宙・天体の時間の流れを思う。これはこのテキストの物語の中に流れている時間上のさまざまな出来事と人々の人生と天空の運動との同時性を眞弓が体感・認識したことを語る

ためであった。

このおかねの葬儀の晩の挿話に続いて、先に述べたアメリカ人飛行士スミスの夜間飛行が描かれる。それも日蝕についての維新以前の予測と維新後の今の新しい時代との予測の違い（学問）が日蝕観察の場で話題になっていたのと同じく、飛行機に象徴される科学技術の特に近代における飛躍的な発展という長い時間の流れの中で絶えず起きる出来事を受け取る人々の態度の年齢（世代）による反復と変化に示される時間の経過、流れの様相を描くためであった。

但し、おかねの葬儀の晩の彗星は知覚の対象であるが、明治十二三年の彗星は当然記憶であり、それは異なる彗星である。しかし彗星の出現という現象としては反復すなわち持続である。同一の空間の上の「もの」の持続と異なる時間のそれぞれの同時性における観察・目撃という記憶と知覚を伴う行動によって主観的・客観的時間の流れが捉えられている。

この二つの彗星についてもコンテキスト上の事実を後に検証したい。

（6）嫁入り道具と雛の行方

明治四十一年の『生^{注3}』には、吉田家の長男鎌が最初に結婚した嫁、テキスト内では名がなく、老母から「英男（論者注 孫の名、以下同じ）の母親」容色も満更ではなかったし、優しくもあつたし、女らしくもあつた。（「三」二十八頁）と回想されて^{注4}いる嫁、「不図嫁の死んだ顔が眼前にちらつく。子癇といふ病氣

は、妊娠中精神の過労から来ると或人が語つた。此身が酷め殺したやうなものだ。かう思ふと神経がブリ／＼する。もう呼吸を取つたと謂ふので、怖々ながら座敷に行つて見る。嫁は蒼白い顔をして死んで居た。鎌は男泣きに泣いて居る。因果な赤児は傍に放り出した儘誰も構手が無い。其死んだ蒼白い嫁の顔！今思つても総身が戦へる。（「十二」七八頁）という、生児を夫と老母に残して子癇で死んだ嫁が持参した嫁入り道具のことが描かれている。

『時は過ぎゆく』にも、「お初」（モデル名とみ）が従兄「実」（花袋の長兄実弥登がモデル）に嫁いで初めてのお産で亡くなつたことと、その彼女が婚家に持参した道具類と雛人形のことがかかれてゐる。しかし、それにまつわる事情について、二つのテキスト間で相違がある。まず、その相違を確認し、それが意味することを考えてみたいと思う。

『時は過ぎゆく』では、まずこのように書かれている。

実の家からは、やがてお初の嫁ぐ時に持つて行つた箆筒や道具類をすべて一切返してよこした。慣例としては、さういふものは、すべて嫁に行つた先のものになるべきであるが、『残して置いて、いろいろなことを思ひ出すのは辛いし、それに、葬式のお世話もかけたし、墓石も其方で思ふやうに立てると言ふしするから。』かう言つて、お幾は皆一つ残らず送り届けて寄越した。

で、その箆筒や道具類はすべて入口の六畳の処に並べて置か

れた。おかねは一度それを調べて見ようと思はないではなかったけれど、いつもやりかけては、すぐやめて了つた。箆箭の抽斗を一つ明けただけでも、娘の面影は漲るやうに母親の胸を圧した。

縮緬の裾模様、襲ね、羽二重の羽織の裏地、繡珍の帯、それには、皆なつかしい娘の移り香がまだ鮮かに残つて嗅がれた。三味線の糸を入れた小箱、袱紗、香合、手帳、其処からは、さういふものが一つ一つ出て来た。おかねは堪らなくなつたやうに、急いで箆箭の抽斗を閉めて了つた。(二十八) 一九九頁)

娘お初の嫁入り道具が婚家先から姑の「お幾」の意志で実家に戻され、その娘の思い出の残る品々が亡き娘に対する母親の追慕を一層強めるという哀切極まりない場面である。テキストではこの後に良太夫婦の一人息子詮造の海外における行方不明の挿話が続く。

お幾の長男でお初の夫の実はお初の産褥死の十日前に役所を免職になつていて「お幾にはこの生計の不如意な時に際して、また、かういふ災害に遭ふといふことが辛かつた。」と前章で書かれていのであるから、生計維持の苦労は続いていて、葬式や墓石に関して実家が引き受けてくれて負担がなくなつたにしても、慣習を度外視してまで嫁入り道具などが返されたということは意外性がある。親同士が義理の姉妹だからか、或いは嫁いびりをしたお幾にお初の死に対する罪障感、後ろめたさがあつたから返されたのだろうか。

『時は過ぎゆく』の「三十」の章では、おかねはこの娘の形見をそのまま置いておいても仕方がないと箆箭の抽斗を開けて見るが、すぐ娘のことを思い出して泣いてしまい、思い切つて古着屋を呼び、取り出して見せる。しかし、やはり、着物にまつわる娘の生前の姿を思い出して、惜しくないものを二三枚売つたほかは、また抽斗に戻してしまふ。娘の遺品は彼女からつらい思いを引き出す、それを処分すると娘を再び失うような気がして、結局処分できないのであらう。

同じくお初の形見である雛人形については『時は過ぎゆく』の「三十四」章に語られている。「毎年三月の節句には、お初の残して行つた雛壇が奥の四畳半の薄暗い空気に飾られた。」とある。その古い雛や大原女などの人形はお初の思い出だけではない、おかね自身のさまざまな思い出の品でもある。「其他、皿にしても、器具にしても、箆箭にしても、一つとしてその時々歴史と追憶を持つてゐないものはなかつた。」のである。お初が死んだ翌年には思い出すからと出さなかつた。その翌々年には古道具屋に売ろうと一度は出して見たが、娘の形見としてはあまりに安いのではやる。それ以降は節句のたびに飾るようになる。雛人形も娘の不在という空虚な穴を埋めるものであると同時に、一層喪失感も深める両義性を持つ品なのである。また、それらの「もの」とそれにまつわる記憶とそれを出し入れする行為の「記憶と現在の知覚」は娘がいた時とその後不在になつたそれぞれの長い時間の経過、時間の隔たりを語っている。それはおかねにとつての主観的時間であると同時に、さまざまな出来事や場所、空間の

同時性を持つ客観的時間でもある。この初の遺品の嫁入り道具と雛壇・雛人形に関する挿話は『時は過ぎゆく』では第二章を占めている。短い挿話の多いこのテキストでは、比較的長い挿話ということになる。ところで、この嫁入り道具は『生』では次のように語られていた。

青山の嫁の墓が今度は眼につく。椿、楓樹、風雨に曝された墓石、嫁の道具を帰す帰さぬで、一悶着があつて、三百代言風の男が実家から来て、五時間も荒々しい声で饒舌つた。主人の生優しい声が歯痒くつて、歯痒くつて次の間に聞いて居られなくなつて、飛び出して行かうかと、母親は幾度も思つた。で、交渉の結果、縮緬の婚札着を売つて、其青山の墓石が建てられたのだ。〔十一〕七十九頁)

先にも他の箇所を引いたが『生』の老母が死病の床に横たわり、襲つて来る痛みに苦しみがながら、自分の人生や周囲の人間についてあらゆる感情と思いを心に思い浮かべるといふ意識の流れを描く先駆的な手法による場面の一つで、老母の長男の縁と結婚したが、子癇で死んだ最初の嫁のことを思い出している。『時は過ぎゆく』の実際の母親お幾、嫁お初にそれぞれ当たる人物である。執筆時期にはば八年の年月の隔たりがあるが、この二つのテキストでは、婚家の母親と実家の母親の嫁入り道具に対する態度、その時起きた出来事は全く異なつてしまつてゐる。

『生』においては、実家はまず嫁入り道具を返すことを要求

し、婚家は拒否している。その後、本当の代言人（弁護士）かどうか分からないようなあやしい男が来て、嫁入り道具を実家に返すことを要求し、大声で五時間も言い争つてゐる。男の態度は実家の親の嫁入り道具を返して貰いたいという強固な意志に基づいているはずである。そして対面で長時間争ひ、「交渉の結果、縮緬の婚札着を売つて、其青山の墓石が建てられたのだ。」ということは、所有物の正しい帰属が法的にどちらにあるかという問題や慣習はともかく、婚家が返さなかつたのは、家計も貧しく、嫁入り道具を売つてその足しにしたいと考えていたからでもある。嫁の墓石を婚家の墓地に立てる費用もなかつたのである。嫁の持参したものは婚家のものという慣習を守るといふ誇り高き建前主義で執拗に拒否したのでないことは、金のかかる墓石費の問題が解決すれば、後は返してかまわないという婚家の態度に表れている。

実家が返還を強固に要求した事情は直接は語られていない。「交渉の結果」の内容は墓石の問題だけしか語られていない。

老母は「子癇といふ病氣は、妊娠中精神の過労から来ると或人が語つた。」というように嫁の死に自己の態度や行為が原因したかも知れないと感じてゐるし、「睦しい若い夫婦の愛情」に二十年来愛育した息子を奪われる気がして孤独を感じ、「一方では理由の無い嫉妬と忿怒とを感じた。襖を隔て、の夜のさゞめ言、老母は嫁を仇敵の如く憎んだ。」というように嫁に対する感情も明瞭に自覚している。葬式の時の「実家の父親の悲憤」も思ひ出している。老母は明らかに罪障感を抱いているが、それは嫁入り道

具を返すとか返さないという問題に結び付いていない。

『生』では長男鐙の最初の嫁は名も無く、そのモデルたちがそうであつたようなイトコ結婚であつたなどとも書かれていない。

近しい親類同士の結婚で、嫁入り道具に関する返す、返さないというトラブルが起きるというのは説得力のない、つまりリアリティのない物語設定であると作者は考えたのかも知れない。コンテキスト上の事実がどうだったかは考える必要はないが、執拗に娘の嫁入り道具類の返還を実家が迫つたのは、単に物を惜しんだのではなく、娘の死に至るまでの姑の仕打ちに対する実家の親たちの怒り・無念、後悔、結婚後それほど時間が経っていないためにまだ他家の人間になつたと感じられず、品々は「娘のもの」という思い、娘の思い出が喚起される品々だから側に置いておきたいという痛切な思いが実家にあつたからだろうと想像できる。

さて、『時は過ぎゆく』の方では先に見たように、姑お幾の意志によつて積極的に返されたのであるが、それは姑のお幾が生前には嫁につらく当たつたかも知れないが、亡くなってみれば姪としてやはり可愛いかったのだということ、お幾のやさしさも意味しているし、義理の姉妹としておかねと親しく過ごした若い時代からの長い関係から、おかねの娘への思いと娘の形見の品への愛着も察して、慣習を無視して返したのであろう。

葬式の費用を実家が出して呉れたことと墓石の建設を引き受けてくれたことを感謝しているのも、青山良太夫婦の好意を有り難く受け入れているということを示す細やかで心の籠もつた挨拶である。良太もおかねもお幾という姑に対する怒りがあつたかも知

れないが、葬儀が滞りなく行われ、娘が無事に墓に入ることをまづ望んだのであろう。嫁入り道具に関しては両家にわだかまりは存在しない。母のおかねも慣習をあえて無視して一人娘を偲ぶよすがを与えてくれたお幾に厚く感謝しているであらう。

そして『生』においては、婚家では青山墓地に嫁の墓石を建てるために「縮緬の婚礼着」を売つたが、『時は過ぎゆく』においては、墓は実家すなわち青山夫婦が建てたから着物は関係ない。返して来た着物類の中にある「縮緬の裾模様襲ね」が『生』の「縮緬の婚礼着」に該当すると思えば、「縮緬の婚礼着」も売られていない。お幾はすべてを返したのである。

『時は過ぎゆく』においてお幾が積極的に嫁入り道具（着物類も含めて）をおかねに返したという設定になつたのは、お初の産褥死を巡つて感情的なわだかまりが出来たお幾とおかねが、婿であり息子である実が再婚した新たな嫁に対して、また、お初の残した男児重雄と嫁の関係に対しても互いに似た立場になり、一種の共同戦線を張ることになり、お初の結婚以前の、山形時代からの義理の姉妹の親しい関係を回復し、二人の間に再び交流が生まれるという物語の展開を必然的にする。もちろん、実が後に弟の結婚の媒酌を良太夫婦に頼んだ時の言葉が示しているように、娘の婿であつたことも含めて甥であり、子のいない良太夫婦にとっては眞弓も含めて息子たちのように頼りにしなければならぬ存在（それは実現しなかったが）として描くためであつたからであらう。

なお『時は過ぎゆく』の先行作品である「流水」（『文章世界』

大正三・一・二)でも、従妹(漢字を当てた「富」という本名が使われている)が嫁入り三年後に二十一歳で産褥死した後にやはり姑は嫁入り道具を実家に返している。語り手の「私」によると、『思ひを残さないやうに——』かう言つて母は其時富さんの道具を叔父叔母にかへしてやつた。」ということになっている。この「思ひ」は嫁がこの世に思いを残さず成仏するようにという意味であろう。「流水」では、姑の嫁に対する激しい嫉妬や憎悪、厳しさは一切存在していない。あるのは若くして産褥死した姪でもある嫁に対する同情だけである。

しかし、重要なのは、お幾の自発的返還という設定がおかねが返つて来た娘の嫁入り道具によつて娘の喪失を思い出せられると同時に慰めも得る長い時間の経過を主観的時間継起として、また、時計の時間でもある客観的時間継起として描くことが出来、かつ一時は齟齬を来した二人の關係が修復されて続くことが可能にしたことを時間の相のもとに語ることが出来るようになったということであろう。

さて「雛人形」の方はどうか。明治四十二年の『妻』^(注5)の「二十三」章の末尾は、

三月の節句には、下の家の座敷に古い雛が飾られた。これは前の細君の持つて来たものである。女の子も無いのに、こんなもの面倒臭いと、毎年お三輪が邪魔にするが、主人はいつも手づから丁寧に壇を掃へて飾つた。菱餅に白酒、紅梅が桃の代り

に花瓶に挿されて、高島田に結つた先妻の娘姿の写真が雛壇に置かれた。(四〇一〜四〇二頁)^(注6)

というパラグラフで結ばれている。「主人」とは主人公「勤」の長兄で、結婚して間もない勤夫婦の家の下に位置する借家に住んでいるので「下の家」というのである。「お三輪」は長兄の現在の妻である。二人の間には子が無い。この挿話は勤の兄のめめさと気持ちのやさしさ、亡き妻を最も愛していた気持ちが語られている。この場面は『妻』の「中村の総領の兄は弱い男だ。弱いから従つて同情がある。」(「二十二」三九三頁)^(注7)とか『時は過ぎゆく』の眞弓が、『弱いんだよ、兄貴は——。(後略)』という長兄の弱さを語る挿話の機能も持っているであろう。『生』ではこの長兄鎌の最初の妻が「子癩」で男児を生んで亡くなった後に間もなく再婚、しかしその二度目の妻は男児が生後すぐに死んだので、その責任を問う母親の意志もあつて離婚されたように書かれている。「前の細君」はこの二番目の妻ではない。離婚した妻の写真を「先妻の娘姿の写真」として雛壇に飾るようなことはないはずだ。(亡妻)だから三度目の妻「お三輪」が雛を飾るのを邪魔にするにもかかわらず、夫は偲ぶような写真を飾ることが出来るのである。

この『妻』の「古い雛」と『時は過ぎゆく』の「お初に残して行つた雛壇」とはどういう關係があるのか、コンテキスト上の事実は分らない。

それらはテキスト上では、『妻』では亡くなった先妻の雛が残

されており、妻が亡くなった時には「声を放つて慟哭した」(「十二」三九五頁)という夫の初婚の亡妻に対する癒しがない思いと夫の性情を語る題材(モチーフ)として機能し、『時は過ぎゆく』では娘お初の早過ぎる死の後、毎年出して娘の生前を偲び、かつおかね自身の過去を思い出すようになった。それはお幾が進んで返して寄越した嫁入り道具と全く同じ意味をおかねに對して持つている。

そして、これらのお初の遺品の嫁入り道具と雛壇・雛人形、娘不在の雛の節句の挿話は重ねられることによって、母のおかねにとって一人娘の死という喪失の打撃がいかに深いものであったかを語る機能を持つと同時に、息子の詮造も生死不明になり、息子や娘の不在という喪失の打撃が主観的に同時に客観的に過去から現在、未来へと長い時間続いて行くということを語ることを可能にしている。

特に嫁入り道具と衣裳に関しては、いつとき関係に亀裂の生じた義理の姉妹が共有している山形時代の思い出を反芻しながら、また、重雄という遺児をめぐって現在の嫁に対して同じ立場にもなっており、お幾が亡くなるまで睦まじく過ごさうになるという変化を必然とするのである。

ところで、嫁入り道具や衣裳、雛人形の行方どころかその存在自体が花袋の虚構であったとしてもここでは問題はない。それぞれのテキストにおいてその題材(モチーフ)が果たしている機能、その必然性がテキストにとっての「事実」であろう。

(7) 青山良太の媒酌人問題と兄弟の結婚の順序

『時は過ぎゆく』の「四十」では、おかねが寝込んだお幾や重雄の世話する者が必要だ、離婚した二番目の嫁お雪が戻らないかと実に聞き、彼は母が気に入っていないから可能性はないと言ったすぐ後に、三度目の再婚が突然語られる。

処が、突然近所から世話する人があつて、てきぱきと話は纏つて、病人(論者注 お幾のこと)もさうする方が好いと言ふので、その年の中に、実は新たに結婚した。(二六九頁)

続いて眞弓の思い合っている同士の結婚話が持ち上がり、実は良太夫婦の家に行き、眞弓ももう二十九歳になるから母を安心させるためと媒酌を頼む。

『母さんは?』

『母さんも好いつて言ふんです。』

『それなら好いだらう。』

『それには、叔父さん叔母さんに、是非媒酌になつて戴く方が好いと思ふんですが。——い、え、いろいろな世話は私がしますから、当日だけさうなつて戴けば好いんですから。』実の心では兄弟は皆一方ならずこの叔父叔母に世話になつてゐるのだから、か、り子のない叔父叔母に取つても、その方が将来の縁が深くなつて好いと思つたのであつた。

で、良太とおかねは、実の結婚式に列なつてから、二月と経たない中に、再び紋付きを着て、上水に添つた道を山の手の方へと行つた。(四十)二七〇頁)

日が暮れる時分に花嫁は姉に送られて実の家にやつて来て、媒酌人役の良太夫婦がそれを迎えるなど、やや詳しく式の進行が語られた後、二人は維新後に自分や身の回りに起きたことに思いを馳せつつ、月明の中を二台の俚に分乗して帰り道をひた走る。

良太は過ぎ去つて行く年月の悠久^{きゆうきう}なのを思はない訳には行かなかつた。(四十)二七二頁)

実の三度目の結婚の時は腹痛のため早く退席した母のお幾も、今度は機嫌良く笑つていた。出席者の眞弓の亡姉の夫石川も半ば酔つて時間の経つことの速さを述懐する。そして、語り手は「あらゆる艱難、あらゆる辛苦は、時の力の中に氷りのやうに跡なく解けて行つて了つてゐた。」と「時の力」によって人々が「艱難」^{かんなん}「辛苦」から解放されたと語る。

「時の力」は島崎藤村以来『時は過ぎゆく』を論じる者にしばしば引用される。ここでは人間が経験した出来事が当初持つていた肉体的苦痛・心的衝撃力、トラウマが時間的経過(時間的距離)に反比例して忘れられ、癒されることを言っているのである。植村恒一郎は大地を歩く人間の同じ場所を占拠できない知覚の交替が過去・現在・未来という時間様相を持つ主観的時間継起

であると言っている。肉体的苦痛・心的衝撃力、トラウマは内的知覚である。過去は記憶である。記憶は時間経過とともに薄れる。時間が人間に対して持つ救済力は人間が時間的存在であることによつて起きるのである。

続けて、「良太や石川は、嫁の父と舊藩時代の話などをした。嫁の父は酔つて高砂などを謡つた。」と語られているが、次のパラグラフの中で先に引いた良太の過ぎ行く年月の悠久なことへの思いが語られる。すでに佐々木さよが的確な指摘と考察を『時は過ぎゆく』の世界^{せかい}で行っているが、祖父母、親たちがこの世を去り、幼かった子供たちが成人して結婚し、間もなく子が生まれるそういう個人的差異は持ちながらも反復される人間の営みを貫く時間を「悠久」と感じるのであらう。この「悠久」は先にも触れたおかねの葬儀の後の早朝に眞弓が見る彗星や「穹窿」の時間でクライマックスを迎える。漸層法的物語構成方法である。その時、眞弓という登場人物がテキストで持つ機能も明瞭になるであらう。そのクライマックスで語られる時間の意味についてもその時に検討しよう。

ところで、ここで問題にしたいのは、良太夫婦の媒酌と結婚式列席の件である。

『生』では、一家の主人の婚姻の式宴は次のように語られている。

式の準備が進行中に、寢床の母親と老人が話している。「其傍に一人の実直らしい老人が居た。これは老母の義弟であつた。」この老人は後に出て来る「主人の叔父」の可能性があるが、

『嫁取と謂ふものは手数なもので……』と老人が言ふと、
『本当ですよ。かう幾度も嫁を貰つては、大抵な身代では堪り
つこはありはしません。』

『今度は好いのが欲しいもんだが……。』

『本当ですよ。』

(二三二四頁)

という問答から考えれば初婚で産褥死した娘の親の発言とは考
え難い。亡くなった自分の娘に対して否定的だからである。しか
し『生』では初婚の嫁が主人すなわち夫の従妹だったとは書かれ
ていないので、列席者の「叔父」が他人事としてこのような感想
を洩らすように設定することは可能であろう。

内々の親類ばかりを招いたのであるが、先方の客が長兄と仲
兄と弟とで三人、主人と主人の叔父と義兄(論者注『時は過
ぎゆく』の長兄実たちの亡姉てつが結婚した石川に該当する)
と銑之助と其妻と、それに花嫁と媒酌夫婦を加へて都合十一
人、八畳の一間に(下略)」

(二三三〇頁)

右の「主人の叔父」は『時は過ぎゆく』の青山良太に該当す
る。しかし、彼は母親を見舞つて話をした後(と一応読んでお
く)は式の間話しもしないし、その妻つまり血縁の叔母、『時は
過ぎゆく』のおかねに該当する人物は姿も見えない。『時は過ぎ
ゆく』では既に見たように良太もおかねも実の式に列なつたと語
られている。『生』では、銑之助と新婚の妻梅も長兄の式後の宴

で親類として先方に紹介され、二人は連れだつて裏手の自分の家
に帰り、寝支度をして寝るまでが書かれている。勿論、『時は過
ぎゆく』ではそんなことはあり得ない。銑之助に当たる眞弓はま
だ結婚していないからである。兄の三度目の再婚と弟の結婚の順
序が『生』と『時は過ぎゆく』では逆になっている。

それでは「妻」ではどうか。『生』の銑之助と梅にあたる人物
は「妻」では勤とお光だが二人は既に結婚していて、むしろ、お
光の実家の弟の結婚、勤夫婦の初子と二番目の子の出産の挿話が
主になっている。『時は過ぎゆく』で媒酌人の役を勤めた良太、
おかねに該当する人物は媒酌人を務めたかも知れないが、それ
は全く言及されていない。

コンテキスト上の同じ素材に基づいていながら、兄と弟の結婚
の順序が違つていたり、同じ人物と同じ場面をモデルにしてもそ
の在り方が違うのは、テーマ、モチーフが異なるのだから当然だ
が、逆に、その違いからテーマやモチーフを推量する読みが可能
になるはずである。ここではその違いは右に述べたように、時の
経過に関する言説を語るのに適切なモチーフを得ることが出来る
かどうかであるが、それと関連して、花袋にとつての青山良太夫
婦の存在の重さが『生』や『妻』のような作品の発表時と異なつ
て来たということもあるだろう。

定本花袋全集別巻の年譜によれば、明治三十九年九月一七日に
花袋は長兄実弥登の子の眞鉄(しげてつ)と大工・請負師を伴つて、良太が幹
旋した彼の住む長屋に近い東京府豊多摩郡代々幡村大字代々木一
三二番の土地に縄を引きに行き、三ヶ月弱経つて新築なつた家に

引つ越している。『生』は明治四十一年四月から七月まで「読売新聞」に連載され、『妻』は書き下ろしで明治四十二年五月廿五日の刊行である。花袋は「蒲団」で一躍文壇や世間の注目を浴びたが、作家としての真の力量が問われるような決心でこの二編の長編の創作に挑戦したであろう。新居は花袋の人生の上昇へと向かう未来が賭けられた場でもあった。

その時既に明治二十五年五月から二十七年一月の間に岡谷繁実
は良太が半生を託した寒香園の土地を淀橋浄水場建設のために
売ってしまった^{（注10）}いたが、花袋は『時は過ぎゆく』を刊行する大正
五年を経て良太が没するまでは十年以上身近に良太と接し、少
年時と違つて社会人として、文学者としての眼で彼を見ていたの
である。

良太の没年は全集別巻では大正六年一月一七日となっている。
つまり『時は過ぎゆく』刊行の翌年亡くなっている。しかし、阿
部弥生さん^{（注11）}によれば大正九年十月十九日と四年近くも長生きして
いる。しかしこの没年はまだ公表されていない資料に基づいてい
るので、ここではこれ以上の言及は差し控える。

花袋は少年期からの苦難を経て成功を獲得した後に、肉体的な
下降期を迎え、成功の空しさも味わい、いわゆる「四十の坂」の
生の危機に囚われ始めた時に、自分が人生に取り組んだ姿勢とあ
る意味では共通し、別の意味では相反する人生を生きる身近かな
良太の存在が内面的つながりを持って大きく眼に映つて来たのだ
と思われる。先行する「流水」にそのモチーフは既に試行されて
いるが、時間という問題を意識し、それについての考察を表象化

しようとした時に、良太の存在と彼が辿つた人生はそのテーマを
託することができる優れたモチーフになったのである。しかし、
「流水」の語り手は主人公の「私」であるが故に、かえつて客観
小説スタイルの『時は過ぎゆく』より虚構性が高いことも興味深
い。

ところで、良太夫婦の喪失の物語の原型は悲慘小説・深刻小説
と見なしてよい明治三十二年の文語体小説「柿の実」^{（注12）}である。こ
の作品に先行する明治二十五年の「秋社」^{（注13）}もモデルは良太夫婦と
孫の真鉄である。「秋社」は村社の秋祭りに祖母と里親に連れら
れた孫が亡母の両親から柿の実を貰つて帰る一日だけの物語であ
る。それに対し、「柿の実」は、元武士の老父が、奥の邸の差配
をし、老妻も邸で働き、娘は男児を残して亡くなり、息子もオー
ストラリアで不慮の死を遂げ、貯金は銀行の破産で失われ、娘の
形見の孫の男児が父に伴われて来て、祖父が大事に守つて来た柿
の実を貰つて一泊したが、帰路が寒過ぎたせいか帰宅後間もなく
ジフテリアに罹患して亡くなり、老夫婦は絶望して縊死するとい
う徹底的な喪失の物語である。物語の大筋にも細部にも『時は過
ぎゆく』と共通の題材がかなり取り上げられている。しかし、老
父が差配する土地が旧大名屋敷だったとか、それが浄水場用地と
して売却されたことは出て来ない。コンテキストの寒香園の土地
の大部分が浄水場に売却されたのは明治二十五年だから、「秋社」
の執筆時はぎりぎりまだ存在していたかも知れないが、「柿の実」
の時点ではもう存在しなかった。急逝する清という孫は失われた
旧大名下屋敷の庭園の隠喩なのかも知れない。

「柿の実」は花袋の初期小説としては構成もかなり工夫されており、過度に感傷的な面を差し引けば、老夫婦の悲惨な生涯はそれなりに読む者に同情を引き起こして迫る力を持っている。

しかし、『時は過ぎゆく』が先行した「柿の実」と異なるのは何と言つても、社会状況の展開と同時性を持つ人間たちの長い、あるいは余りにも短い人生とその生き様、そして当然だが時間の問題である。特に「流水」「時は過ぎゆく」で問題にされているような、良太やおかねのかくあるべきとされているような理想型としての人間像は全くモチーフになっていない。

先に見た『生』における兄と弟の婚姻の場における叔父良太の姿も喪失や時間、人間の理想型のモチーフと無縁である。もちろん『妻』ではその姿の片鱗さえない。「流水」「時は過ぎゆく」でそれが大きく異なつたのは、良太夫婦と花袋が身近に接することが長くなり、かつ花袋の人生上の問題にとつて彼らが内面的に意味を持つようになった結果であり、また、明治時代が終わり大正時代に入つて、明治的な人間の生き方からの転換が起きているのを花袋が敏感に感じとつたということもあると思われる。

それでは、兄と弟の結婚の順序はどうか。

① 二十八になつた眞弓は、その頃、何うやらかうやら書いたもので自分だけは食つて行かれると言ふので、実の家のすぐ裏に明家のあつたのを一軒借りて、手廻りの道具は、二つあるものは、本家からわけてやつて、兎に角世帯を持つことは持つた

が、その時分には、お幾はそこに出かけて行くにさへ呼吸が切れて仕方がないと言つてゐた。嫁が出て行つてからは、丸鬚に結つた中年増などが手伝ひに来てゐた。（「四十」二六八頁）

眞弓の二十八をモデル花袋の二十八とすれば明治三十一年になる。嫂ことが離縁されたのは明治三十年四月十九日である。テキストではやや曖昧な書き方であるが眞弓が分家してから嫂が出て行つたように読める。しかしコンテキスト上では逆で、嫂の方が先に出ている。

コンテキスト上では一八九九年（明治三十二年）年の花袋の結婚後の「二月二十日頃兄実弥登の家から分家。」ということになっている。もつとも年譜の「分家」が母、兄の家から花袋が物理的に移転したことを言っているのか、戸主である兄の戸籍から脱したことを言っているのかは定かではない。

② 処が、突然近所から世話する人があつて、てきぱきと話は纏つて、病人もさうする方が好いと言ふので、その年のうちに、実は新たに結婚した。（「四十」二六九頁）

「その年」とはどの年か曖昧。

③ 続いて眞弓の方にも、結婚の話があつた。それは友達の妹か何かで、両方と思ひあつて、何うしてもそれを貰ひたいといふ話であつた。実は来て話した。『母さんがあんなだから好くな

つてからと言ふ方が好いんですけれども、また一方から考へると、結婚させて、母さんに安心させるのも好いと思ひますから、儀式をさせて了はうと思ふんです。行田の土族の娘で、私も一度逢つて見ましたが、あれならわるいことはなからうと思ひます。眞弓ももう来年二十九ですからな。」「四十」二六九頁)

眞弓は現在時点で二十八、その年に実は結婚したことになる。

しかし、眞弓二十八の年、すなわち花袋二十八の年には実弥登は再婚していない。

花袋の結婚は明治三十二年一月十七日、二十九歳、相手は伊藤里さ(太田玉茗妹)、実弥登の結婚は花袋二十八でなく二十九の明治三十二年五月、長坂としと結婚、である。つまり、花袋の結婚が一月、同年の五月に実弥登が結婚。これは『生』の順序通りであるが、この兄弟の結婚の順序が『時は過ぎゆく』では入れ替わったのである。

コンテキスト上の理由は、兄は三度目の再婚だから弟の結婚が先ということになったのだらうと想像できる。眞弓は結婚以前に実の家を出て世帯が独立しているとすれば、結婚は早くて当然であるが、テキストは、まず兄が身を固めて落ちついてから弟の結婚を年齢も考えて世話したということになる。しかし、弟が後から結婚したのは、『生』の「銑之助のセンチメンタルな心では、人が再婚するなど、といふのが既に分からなかつた。」以下の

「夫婦の愛情」を結婚の重要な基礎と考え、自らは恋焦がれた娘と結婚したばかりの銑之助の感想は成り立ちにくかつたと思われる。

④ で、良太とおかねとは、実の結婚式に列つてから二月と経たない中に、再び紋付を着て、上水に添つた道を山の手の方へと行つた。」「四十」二七〇頁)

順序が入れ替わつたばかりでなく、コンテキスト上の二つの結婚の期間もテキストでは半分以上に短縮されている。

⑤ 眞弓の時には、お幾の機嫌が好かつた。(同)
⑥ 半年ほど苦しんで、お幾はその年の八月の中旬に死んで行つた。(中略)とても助からないといふ医師の宣告は、その年の花の咲く時分から受けていたが(中略)八月の初めに、おかねが見舞つた時には、体は痩せ、骨はあらはに、顔つきなども變つて、口も碌々きけなかつた。(四十一)二七三頁)

コンテキストでは明治三十二年八月十九日、母でつ、腸癌で死去(享年六十二)となつてゐる。テキストでは実は眞弓の結婚する二ヶ月ちよつと前に三度目の結婚をし、その後のわずかな期間に良太夫妻に媒酌人の役を頼んで二十八歳(花袋二十九歳)の眞弓を結婚させ、母お幾はその後の八月の中旬に死んだことになる。花袋の母、お幾の命日はさすがに正確に書かれている。

(8) 眞弓がおかねを山形に誘う挿話

「四十五」「四十六」(二八七頁―三一頁)は日露戦争、それも日露戦争とは書かず、「また大きな凄まじい戦争が日本とロシアとの間に起つて来てゐた。」(二九五頁)という語り方であるが、(日露)戦争の前後の時代で、兄の実が貧窮し、見るからに憔悴、性格も内気になやしくなつて行くのと対照的に、弟の眞弓は身なりも立派になつて俥に乗り、さらに戦争に従軍記者として出かけてからは肥つて体格もよくなり、三十六、七の男盛りになつたというように、兄は人生の下降線を、弟は上昇線を辿り、その頂点のように「四十六」では弟は良太が世話した土地に家を新築する。兄弟の長姉の嫁した石川は、元会津藩士で警視庁巡査部長、戦争から生還後二階屋を新築し、三人の子を残した妻に死なれたが、署長になり、左遷されて田舎の郡長になり、退職する。長男は優秀な成績で士官学校を卒業して任官後間もなく結核に倒れ、治癒の見込みがない。妻が亡くなる直前に生まれた女子は夭折している。石川の人生は上昇から下降へ転じた例である。下降から上昇へ、上昇から下降への変化・運動は、若から老へ、老から死へ、有から無(喪失)へという変化・運動と同じく長い客観的時間の経過を示している。

眞弓の新築は良太やおかねが目撃する戦後の社会の急劇な拡大・発展の中の出来事として語られている。「四十六」の冒頭で二本のポールで街路を走る電車・街上の電灯・家庭の電話などの科学技術の発展、それと同時に進行する東京近郊の宅地化とその

膨張、地代の高騰などに良太は驚いているが、その良太のまえにひよつこり姿を現して借地の斡旋を頼み、新築計画を話すのは、弟の経済的・社会的地位の上昇も同じように戦後の発展のもたらしたものであることを示している。これらの出来事、その変化の発展は、繰り返すように、同じ大地の上にいる人間が同時に共通に経験する出来事であり、太陽の運行が基になっている機械時計が時間を計っている。つまり、日付の時間すなわち絶対的・歴史的・公共的時間である客観的時間の流れ上に位置づけることができるはずのものである。

そして「四十七」では眞弓が突然おかねの許を訪れて山形へ旅に誘うが、それは「四十六」の(日露)戦争後の科学技術の発展の一つである鉄道網の拡大がもたらす出来事である。「四十七」の山形への旅行の誘いの挿話は唐突であるが、右のように読めば特に同時性に関しては自然な展開だと分かる。もちろん、「四十七」の挿話はそれだけの意味で終わるものではない。

① ある時、眞弓は突然やつて来ておかねに言つた。(四十七) 三二二頁)

② 『何うして、急にそんなことを?』『でも、汽車が漸く開通しましたから、板谷峠と言ふのがありますね。あそこで、長い間、汽車が難工事で、つかへてゐましたが、漸く先月通じましたから、山形までわけなく行けるんですから。』(中略)『夜上野を立つと、明日の朝は、山形へ着くんですからね。行つて見ませうよ。二三日のつもりで。』『だつて、かう年を老つちや

ね。』『二度、お袋が生きてる中に、是非伴れて行つて見たいと思つてゐたんですよ。一緒に行つて、昔のことを聞いたり、今のさまを見せたりしたら、面白いだらうと思つて……梟のあた立谷川だの山寺だの、さういふ処も一緒に見たいと思つてね。今でも、をばさんの知つてゐる人が生きてゐるにはゐるんでせう。』(「同」三二二―三二三頁)

③『しかし、時と言ふものは面白いもんですね。昔は十日も十五日もかゝつてやつと行つたところを、一晚かそこらで行けるやうになつたんですからね。をばさんの生れた所に停車場が出来てますよ。』『高揃^{たかま}にかえ?』『い、え、漆山。』(中略)／かう言つて、その時分を思ひ出すやうにして、『さう言へば、お国替の時が目に見えるやうだ。私はまだ十九でね。祖父さんと盲目の祖母さんと、それからお前のお父さんとお母さんとそれだけで来たんだがね。(後略)』(「同」三一四―三一五頁)

コンテキスト上の事実は以下の通りである。

奥羽南線として日本鉄道株式会社が奥羽山脈を貫く福島―米沢間の鉄道建設に着手したのは明治二十七年二月であり、五年三ヶ月の歳月を要した難工事の末、山形県置賜郡山上村字峠の板谷峠に「峠信号所」が開設されたのは一八九九(明治三十二)年五月十五日、そして「峠信号所」は同年八月一日に一〇〇〇分の三十八の急勾配をスイッチバックで走る赤岩駅から大沢駅まで続く四段スイッチバック駅のひとつの「峠駅」となつて開業した。

米沢赤湯間は三十三年四月二十一日、赤湯上ノ山間三十四年二

月二十五日、上の山山形間同四月十一日、山形楯岡間同八月二十三日、楯岡大石田間同十月二十一日、大石田舟形間三十五年七月二十一日、舟形新庄間三十六年六月十一日、新庄院内間三十七年十月二十一日、院内湯沢間三十八年七月五日と順次延通して行く。そして、一九〇五(明治三十八)年七月五日に奥羽南線(福島―湯沢)と奥羽北線(青森―湯沢)が接続し、奥羽本線全線が開業した。同九月十四日に全通式が行われた。

因みに漆山駅は明治三十五年十一月一日に国有鉄道駅として、高揃^{たかま}駅にいたつては太平洋戦後の昭和二十七年三月一日にそれぞれ開業している。

ところで、『漸く先月通じましたから、山形までわけなく行けるんですから。』の「先月」は何年の何月に該当するのか。右から考えれば、次のような可能性が考えられる。

① 一八九九(明治三十二)年五月十五日の板谷峠の峠信号所、同年八月一日の峠駅開業による福島―米沢間の開通時を「先月」と言っている。

② 一九〇二年(明治三十五年)十一月一日に漆山駅が開業しているから、同年十二月から「先月」と言っている。

③ 一九〇五(明治三十八)年九月十四日に奥羽南線(福島―湯沢)と奥羽北線(青森―湯沢)の全通式が行われ、奥羽本線全線が開業したことを「先月」と言っている。

眞弓は板谷峠が難工事でつかえていたのが先月通じたと明らかに言っているから、①のことを言っていると思われるが、これは

明治三十二年五月で、まだお幾のモデル花袋の母でつは病床にあった。それにこの章が（日露）戦争後だという時間設定にも合わない。それに米沢より北はまだ未開通である。

『をばさんの生まれた所に停車場が出来てますよ。』と眞弓は言つて、その駅名を「漆山」と教えている。漆山駅開業は右に見たように明治三十五年である。しかし、これも日露戦争前である。叔母は『高嶺にかえ?』と聞き、眞弓は『い、え、漆山。』と答えているが、確かにその通りで、先に見たように高嶺駅が出来るのは昭和の戦後時代という遠い未来である。先に「四十五」「四十六」の章の時代、社会状況を確認したが、ここから考えるとい九〇五（明治三十八）年九月十四日に奥羽南線（福島～湯沢）と奥羽北線（青森～湯沢）が開通したことを眞弓は言っていることになる。

『時は過ぎゆく』では次の章「四十八」で、「その翌年の秋頃」実が病で駿河台の病院に入院、「十一月のある寒い曇つた午前に」担架で退院、そのあとしばらくして死去したらしいことになっている。

コンテキスト上の出来事と対照させると実のモデル実弥登は一九〇七（明治四十）年十一月九日に享年四十三で死去している。したがって、眞弓が山形行きをおかねに勧めたのはコンテキスト的には奥羽本線全線開通の明治三十八年九月の一ヶ月後である。彼は全線開通によって上野から青森まで行けるようになり、もちろん漆山駅にも明治三十五年十一月に行けるようになっていたけれども、そうなるには遡ってまず明治三十二年五月に福島米

沢間の難工事が完成し、開通していたことが条件だったのを、板谷峠の峠駅が開通した時を以て全線開通時とし、さらに明治三十五年に漆山駅が開業したのも同時代というように言ったのである。しかも、コンテキスト上の全通の翌々年明治四十年はあたかも三十九年であるかのように語られている。

結局テキスト内の眞弓の言う鉄道開通の状況はコンテキスト上の客観的時間である日付すなわち絶対的・歴史的・公共的時間上の出来事と一致しない。前稿で検討した良太の開墾開始の年月と登場人物たちのセツト年齢の検討から判明したように、この眞弓の叔母おかねを山形行きに勧誘する挿話内の出来事も、コンテキスト上の異なる歴史的・時間上の出来事の幾つかを一つに重ねたものである。したがって絶対的な日付である客観的な歴史的・時間上に特定な時点ではない。母お幾の死と二年間の戦争と兄の死という時間の流れの上の虚構の一点と考えるほかない。そして、その時、福島米沢間の難工事によって峠駅が開通する、漆山駅が開業する、例のごとく無名の路線の全線が開通するという出来事も同時にあって、それらの出来事はコンテキストの現実にはない虚構の出来事に化してしまうのである。

佐々木さよは『時は過ぎゆく』を論じて、その中で頻繁に出現する「時分」という語句に注目し、このテキストにおける時間には曖昧さ——したがってそれは広さという優位性にもなる——があるときわめて的確な卓越した判断を下している。秀逸な論考で、論旨には同意できる箇所が多々ある。そして、この「時分」については後続の拙論でも取り上げる予定であるが、佐々木はこ

の「時分」の使い方から出来事と時間について、出来事は明確であるのに対して時間は漠然としているとその対照性を指摘している。確かに、時間についてはその通りであるが、右のように鉄道開通における出来事をコンテキストとテキストを対照して検証すると、出来事の生起もコンテキスト上の明確な歴史的・絶対的・公共的出来事そのままではないと判明するのである。

ところで、この「四十七」章はどういう意味を持っているのか。戦後の新しい出来事、社会状況との関係は前章からの続きでまず分かる。そして、おかねを山形への汽車の旅に誘った後の『しかし、時と言ふものは面白いもんです。昔は十日も十五日もかゝつてやつと行つたところを、一晚かそこらで行けるやうになつたんですからね。』という眞弓の言葉は時間の経過とその「時の力」によつて科学技術発展による新しい出来事が起きたという時間に関するモチーフがここにも流れていることも示している。

しかし、それだけでなく、現在の彼らの「故郷」に藩が移転する前の領地である山形に眞弓の母やおかね叔母を連れて行きたかつたのは、彼女たちの生誕地で、母の結婚やおかねの若き日、そしてお国替えの苦勞などの記憶に彩られた地に連れて行き、懐かしい思い出に浸らせて喜ばせたいという思いやりと同時に、眞弓自身が「父母未生以前自己本来の面目」（夏目漱石）と呼べるような自らの根源的アイデンティティを求める気持ちがあつたからだと思われる。『時は過ぎゆく』には、眞弓のアイデンティティを辿る線が一本織り込まれている。

また、「一緒に行つて、昔のことを聞いたり、今のさまを見せたりしたら、面白いだらうと思つて……」^{ママ}というのは時間認識にかかわるこのテキストのテーマを自己言及的に眞弓という登場人物が「母」に成り代わつて代弁している。時間に関する認識が眞弓夫婦の結婚式の宴では義兄の石川や、宴の帰りの良太の「悠久」に対する思いとして表現されたのと同じ手法である。

つまり、作者はできるだけ多くの登場人物に主観的時間である悠久への思いを抱かせることで、彼らのそれぞれの現在に悠久の時間を融合させ、それによつて、今現在に悠久を客観的時間継起として存在させようと図っている。そのような時間の継起に眞弓の存在は不可欠な機能を持つている。それはテキストのクライマックスである第五十三章の眞弓がおかねの葬儀の晩に彗星の出ている空を眺める場面に示されているが、それについては次稿で考察する。

『時は過ぎゆく』には明治維新をはるかに遡つた時点から継起した時間が出て来る。「三十六」の「三百年、もつと前だ。」（二四七頁）という松の示す時間。文久年間に後醍醐天皇陵の傍らから拾つて来た種から育つた山桜の時間、日蝕や彗星のような宇宙の運動が示す時間、おかねの葬儀の晩の明け方に眞弓が眺めた「穹窿」の幾億年前からの時間。この山形からの時間はお幾やおかねの人生が経験した時間であるが、その時間は明治維新後間もなくから始まるこのテキストの時間が始点を持たず、また、終点も持たない時間の流れの一部であることを示そうとしているのである。

ついでに言えば、花袋自身が山形に行ったのはテキスト内の時間より十年前に遡る明治二十七年十月から約一ヶ月間のことである。

また、コンテキストとしての事実は「おかね」つまりモデルの「まさ」は一八四四（弘化元）年生まれで秋元藩が館林に移封されたのは一八四五（弘化二）年であるから、テキストのお国替えの時に（おかね）十九歳というのは年齢の差がかなり過大である。二箇所で「おかねの十八九の時に、殿様は其処から此方へとお国替になった。」（三一二頁）、「さう言へば、お国替の時が目に見えるやうだ。私はまだ十九でね。」（三一四頁）と説明し、かつ語らせている。実際は田山家は移封より遅れて一八六二（文久二）年六月頃館林に移ったので、この時なら（おかね「まさ」）の年齢は十九であった。賛田太二郎「田山花袋系譜」には、「『館林藩資料』の中に文久二年五月穂弥太に館林移転を命ぜられた」とあると記述されている。他にも『田山花袋歿後七十年記念特別展『時は過ぎゆく』をめぐって——明治維新と田山家の五十年——』のパンフに所載の関連年譜に「文久二年（一八六二）六月頃田山家、山形から館林に移る。」とある。ここでも作者は秋元藩の移封の年と自身の一家の移動と叔母の年齢を同じ時点にしたのである。もちろん、テキスト上の鉄道の開通、駅の開業の日付も出来事も厳密には虚構なのだからから、その意味では時間の在り方に一貫性はある。

また、先にも述べたが、おかねの眞弓の勧誘に対する反応は、日蝕の際の祖父彦太、後の出来事になるが彗星や特に飛行機に示

される良太の態度の反復なのである。

ところで、先行論文でもしばしば問題にされて来た「月日はその中にも流る、やうに過ぎ去つてゐた。」（三十五）（二二五頁）、「時はかうしてゐる間にも早く／＼経つて行くのであつた。」（四十三）（二三四頁）式の語り手による頻繁な、時間への自己言及的語りは、「五十八」の末尾にある坂の下で動かぬ馬を車力が鞭打つ光景のように、まるで動かぬ時間に語り手がムチを打って無理に動かしている印象を受けるが、登場人物や出来事の主観的・客観的時間（厳密には客観的時間の条件を満たしていない）との同時性・同時存在を「日付」に位置づけることができないことにも原因があると思われる。しかし、この問題についても後に取り上げる機会を持ちたい。（続く）

注

- (1) 『定本花袋全集』第六卷所収『時は過ぎゆく』の章番号と頁数、以下同じ
- (2) 傍線は論者によるもの。以下同じ。
- (3) 「読売新聞」明治四一・四・一三／同・七・一九 八十回連載、単行本は易風社 同・一〇・二五
- (4) 『定本花袋全集』第一卷所収『生』の章番号と頁数。以下同じ
- (5) 明治四二・五・二五 今古堂書店
- (6) 『定本花袋全集』第一卷所収『妻』頁数
- (7) 右全集同巻『妻』章番号と頁数。以下同じ。

- (8) 『論考田山花袋』紅野敏郎編 桜楓社 昭和六一・二・二五
所収
- (9) 一九九五・九・三〇
- (10) 『淀橋浄水場史』昭和四一・三・三一 東京都水道局
- (11) 館林教育委員会文化振興課文化財係
- (12) 『文芸倶楽部』明治三二・四・一〇
- (13) 『小桜鍼』明治二五・一一・三
- (14) 『日本鉄道史』「中」(鉄道省 大正一〇・八・三一)、「峠駅
開業77周年記念沿革誌」(謄写版) 昭和五一・五・一五(当
資料は栗野宏「鉄の道と鉄道——滑川鉾山と板谷峠の文化的
景観」(山形大学紀要(人文科学)「第一六卷第三 二〇〇
八・二・一五)に掲載紹介されているものによった。他に、
栗野宏「板谷峠のスイッチバック——奥羽本線板谷峠のス
イッチバック遺構および関連施設群」(置賜文化フォーラ
ム)平成二三・一一)
- (15) 『新潮社日本鉄道旅行地図帳2』平成二〇・六・一八
- (16) 『日本文学研究資料叢書・自然主義文学』有精堂 昭和五〇・
八・一〇 所収)
- (17) 館林市花袋記念館 平成一二・一〇・二一
(わたなべ・まさひこ 元東海大学大学院日本文学科非常勤講師)